

歴史的景観について



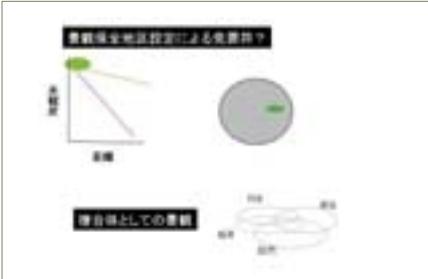
千田 稔氏
(国際日本文化研究センター教授)

略歴

1942年奈良県生まれ。1966年京都大学文学部卒業、1970年同大学院文学研究科博士課程中退。文学博士。追手門学院大学助教授、奈良女子大学教授などを経て、1995年より現職。専門は古代日本の歴史地理学、文化地理学。現在の研究テーマは東アジアにおける都市の起源と系譜。

藤岡謙二郎氏の「歴史的景観の美」

●藤岡謙二郎氏の「歴史的景観の美」は、最終章に主として近畿地方の都市景観問題を論じており、歴史的景観マップづくりや開発と保全の問題などに触れられている先駆的な書籍であるこれを見ると1965年当時から今まで何も進んでいないということが良く分かる。



地区指定されている地域とされていない地域の美観度の格差が問題

●景観はあらゆる所にあるものであり、景観法の中の「景観地区」という言葉が引っかかる。美観地区や保全地区のことを言っているのであろうが、今までの日本の景観の問題は、これを定める事が免罪符になるという考え方方が強かったことではないか。

●指定地区では美観度は高いが、それ以外の地区で急激に美観度が下がるということではなく、少しづつ美観度が下がるような観点の景観づくりが必要である。

景観の難しさは、景観が見えるものと見えないものとの複合体であることが原因

●地理学では「景観」という言葉を明治時代から使っている。建築家が戦後から使い始めたが、景観の考え方方が違う。美しい国づくり政策大綱の「景観」は建築サイドのものである。

●地理学で言う景観は、自然、経済、社会、政治などがひとまとめになったものであり、目に見えないものも景観と呼ぶ。

●景観の難しさは、景観が目に見えるものと見えないものとの複合体であるところにある。景観が悪いから変えようとしても、経済的・社会的問題が絡み、手をつけることが難しい。

地域の歴史的景観の重要性を認識し、発掘していくことが必要

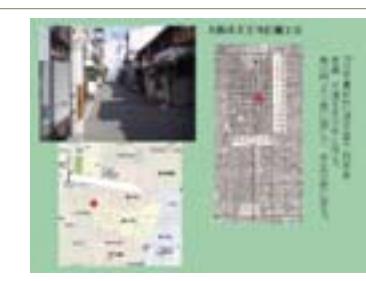
●歴史的景観を保全しなければならないのであるが、歴史的景観としてここが大事であるという認識がないままにデザインや計画がなされている事例が多い。見た目やデザインさえよければ良いというように表面的・視覚的な問題から判断していく。

●奈良盆地の南を走る横大路などは、住民でも推古21年からの日本書紀の記述に対応する道であるという認識は薄い。現状では典型的な良好でない景観であるが、こういうものが歴史的景観として重要であるという認識が大事である。



●平城京の二条大路は朱雀大路とともに歴史的景観の中では非常に重要であり保全を考えるべきであるが、現在は生活道路となっており、全く手が付けられていない。

●天王寺区の細工谷に東西に走る道がある。これは難波京から南に降りてそこから西に抜ける道であって、大阪では最重要の道である。このような奈良時代の難波京の南の南北ラインが現在も生活道路としてあるということを住民も知らない。こういうものを発掘していくことが重要な課題となる。



歴史的景観は山水とともに保全することが重要

●山の保全と川の保全とがバラバラに言われるが、山と川は本来ワンセットのものである。



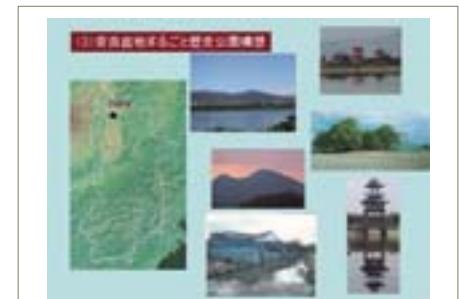
●吉野では吉野川と灰儀の大峰山に至る青根ヶ峰がワンセットとなり、そこに吉野の宮が造られた。

●恭仁京も木津川とそれを取り巻く平地、背後の山が一体となっており、これが都を造る条件であった。この条件を知らないと、部分的な保全の仕方になってしまう。

奈良盆地の歴史的景観の保全は重要

●美観地区的な保全は大阪・京都ができる。しかし、そこから外れるとただの雑踏のまちなみ過ぎない。今まだ可能性が残っているのは奈良盆地であり、いろいろ問題はあるものの、国家事業で丸ごと歴史公園としていけば良いと思う。

●近畿圏整備法において奈良の位置づけが低かったために、今は一周遅れの一一番となっている。国家として保全すれば良い。



奈良盆地の歴史的景観保全に係る諸課題

●近畿の景観問題として古墳の問題がある。天皇陵であるといった問題はあるが、美しい風景であり、これをいかに周辺と調和させるかが課題となる。

●奈良盆地に環濠集落はたくさん残っているが埋め立てられていっている。もっと残すべきであるが難しい。所管がちがうといった話も出てくるが、丸ごと保全する、複合体としての景観を保全するためには省庁を越えた考え方方が重要である。

●藤原京では都市計画委員会で大極殿から大和三山が1/2見えれば良いということになつたが、これなどは大問題となっている。

●鍵・唐古遺跡では土器の破片に描かれていた樓閣状の建築が復元されるとともに、ため池の歴史的意味が認識され、公園化された。